

わたしは荒れ野で叫ぶ声である

学院長 嶋田 順好

5月13日の鎗田謙一先生の校長就任式の際に、洗礼者ヨハネの在り方を通して、校長としての使命について語りました。そのことは本来、宮城学院教職員の全ての方々に共有していただきたい大切な事柄ですから、その一部を抜粋してここで紹介したいと思います。

「預言者以上の者」と主イエスからそう呼ばれた洗礼者ヨハネは、まことに不思議な方法でキリストを証しました。このヨハネの生き様を理解する上で重要な御言葉の一つは、ヨハネによる福音書第1章19節以下の聖句です。そこにはエルサレムから洗礼者ヨハネの動向を探りに来た祭司やレビ人たちが、執拗にヨハネを尋問する場面が記されています。最初に「あなたはどなたですか」と問われた時、ヨハネは真っ先に「わたしはメシアではない」と告白します。更に彼らは畳み掛けるように「あなたはエリヤですか」、「あの預言者なのですか」と考えられる限りの可能性をもって問い質します。しかし、その全ての問いをヨハネは否定し、答えを与えようとはしません。途方に暮れた彼らは、ついに嘆願するようにヨハネに問うのです。「それではいったい、だれなのです。わたしたちをつかわした人々に、返事をしなければなりません。あなたは自分をなんだと言うのですか。」その時、ヨハネの口をついて出た告白が、「わたしは荒れ野で叫ぶ声である」（ヨハネ 1:23）という応答でした。

この世の誰かから「あなたは何者か」と問われたとき、わたしたちは一体何と答えることができるでしょうか。その答えはいろいろでしょう。「鎗田謙一です。仙台在住の国語の教師です。宮城学院中学校高等学校の校長です。」しかし、洗礼者ヨハネはそうは答えませんでした。「私は、『荒れ野で叫ぶ声』である」と答えたのです。「わたしは荒れ野で叫ぶ声」「わたしは声だ」と答えたのです。不思議な自己理解ではないでしょうか。一体、ここにいるわたしたちのうちの誰が、「あなたは何者か」と問われて、そのように答えることができるでしょうか。アウグスティヌスは「洗礼者ヨハネの使命に関する説教」の中で、このヨハネの答えを解説して次のように語りました。

「ヨハネは過ぎ去る声であり、キリストは永遠の言葉である。言葉を取り除けば、声とは何であろうか。意味がなければ音しか残らない。言葉なしの声は耳に入るが心には入らない。声と言葉を見分けることは困難なので、人々はヨハネをキリストだと思った。彼らは声と言葉を取り違えてしまった。しかし、ヨハネは言葉の地位を取ろうとせず、自分を声として証した。『わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。』沈黙を破る声、言い換えれば（この時ヨハネは）『わたしは御言葉（即ち、主イエス・キリスト）が人の心に入れるように言葉を音にのせる声』（となりきると答えたの）である」と。

アウグスティヌスのこの講解は、このテキストに関わるまことに優れた解釈と言わざるを得ません。皆さんもよくご存知のようにヨハネ福音書の冒頭には「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」という書きだし始まる神の言としてのイエス・キリストを証言した聖句が記されています。そのことを受けて、アウグスティヌスは、洗礼者ヨハネは、まさに言としてのイエス・キリストを証しする声になり切ると自分を把握していたというのです。言を伴わない声とは何でしょうか。そうです。意味もなく消えゆく音にすぎません。つまり、ヨハネは、自分の思想や行動について取り立てて語るべきものは何もない。私は声、ただ神の永遠の言そのものである主イエス・キリストを証し、その言を声に乗せ、過ぎ去り行く声にすぎない。ただその声になりきって自分は今、この「荒れ野」のただなかに立っているというのです。

このヨハネの自己理解の姿の中にこそ、福音主義キリスト教に基づく教育を貫く宮城学院中学校、高等学校校長の使命が、力強く告げられているのではないのでしょうか。校長は、なによりも生徒たちに、言葉としてのキリストを「荒れ野」のただなかで証する「声」となり切って立ち続ける存在なのです。